

# 1 ビジネスで重要なのは明瞭表現

学習日 月 日  
理解度 A B C

## ●あいまい表現の多い日本語文脈

「本件に関しまして、不手際がありましたこと、誠に遺憾に思っておりますが、つきましては、今後関係各省庁と密に連絡をとり、再度同様のこと発生させぬよう、鋭意努力していく所存でございますので、よろしくご理解くださるようお願い申し上げます」

国会における官僚の答弁です。この種の表現はほとんど慣例的と言ってもよいくらいによく耳にするものです。この部分だけの速記録を読んでみても、何のことやらさっぱり分からないでしょう。対する議員の質問ないし追及の弁を読まないと分からないのは当然とも言えるかもしれません。しかしながらこの答弁から具体的な行動のイメージは何一つ浮かんでこないことは間違いありません。典型的なあいまい表現でしょう。

官僚や閣僚の答弁のあいまいさは、単に日本語のあいまい表現の問題ではないかもしれません。むしろ意図したあいまいさと評した方がよいでしょう。しかし、それが容易にでき、かつ立派に答弁として通用するところに、日本語のあいまい表現という特性が関係しているとも考えられます。

日本語文脈のあいまいさの原因としては、次の3点があげられます。

- ①主語を落とす
- ②あいまい接続詞を乱用する
- ③抽象表現が多い

これは日本の文化ともかかわりのある問題で、単に日本語の構文だけを取り出して議論できることではないのかもしれませんが。例えば俳句の世界。俳句は世界一の短詩形式です。そこに人生や自然の姿を極限にまで凝縮しながら表現しています。このようなシンボリズム（象徴主義）は、俳句だけでなく、伝統的な日本の文学や芸能の世界、どこにでも見られるものです。そうした日本文化の特性はそれなりの存在感と意義をもって現代でもなお日本の

精神風土に生きています。それはそれで大切にしたいものです。

しかし、ビジネスの世界に入ったらまた別です。そこではあいまい表現はできるだけ避けるべきで、あくまでも基本は明瞭表現が望まれます。

ただし、時によっては戦術的にあいまい表現を必要とする場合もあります。ビジネスとはいえ、多くは日本人を相手にやりとりすることが多いわけですから、あいまい表現が大いに意味を持つ場合もありましょう。

ただ、必要に応じて戦術的にあいまい表現ができるということは、言い換えれば、明瞭表現したいときにはできるという前提がないといけません。一番よくないのは、明瞭表現したつもりであったにもかかわらず、結果的にはあいまい表現であったというものです。ビジネスでは両方を使い分けられるようでないといけません。しかし基本は明瞭表現です。

## ●明瞭表現のためには3つの要素を押さえる

あいまい表現の原因として前項で3つの点をあげました。ですので明瞭表現のためには、その3点の逆のことを行えばよいということになります。

それは次に述べるとおりです。

### ①主語をはっきりさせる

文章の基本構造は主語と述語で構成されます。主語が明確に表示されないと文章構造がはっきりしません。先の官僚の答弁の中には主語の欠落が目立ちます。私たちの日常会話でも主語落ちはかなり見受けられるものです。その点、欧文系は主語がないと文章そのものが成立しないようになっています。英語では“I am ~”、独語でも“Es ist ~”です。

主語がはっきりするとおのずと述語もはっきりしてきます。

### ②論理接続詞を活用する

「～おり」「～あり」「～し」「～が」などの意味不明の接続詞を使って文と文を結びつけるのではなく、例えば「また」とか「なぜなら」等の論理接続詞を正しく使って文をつなげます。

### ③できるだけ具体的に表現する

「～の確立」「～の強化」等の抽象表現を多用すると、メッセージ性が稀薄はくになってしまうため中身がぼやけてしまいます。

次に、上に述べた明瞭表現のための3要素について、さらに詳しく説明していきましょう。

## 2 主語をはっきりさせ、「は」と「が」の乱用に気を付ける

学習日 月 日

理解度 A B C

### ●「は」や「が」が付けば主語になるわけではない

明瞭表現のためにまず第1に心掛けていただきたいことは主語をはっきりさせることです。しかし、それでは「は」とか「が」などの助詞を次に付ければ、その言葉が主語になるかというところが限りません。

例えば「象は鼻が長い」の主語は何でしょうか。主語をあえて特定するとすると、「は」の付いた象なのか、「が」の付いた鼻なのか。「長い」という述語に対する主語となると、当然鼻が主語となります。とするとこの文章は「象の鼻は長い」のように「象は」の「は」を所有格の「の」に変えると、主語、述語の関係の明白な文章になります。

それでは「ネズミは体が小さい」はどうでしょうか。この場合は主語の特定が難しく、ネズミでも体でもどちらでもいけそうです。

「彼女は性格がいい」はどうでしょうか。彼女か、性格か。難しいところですね。考えてみてください。

次の文例はどう見ますか。「今日は、ラーメンが食べたい」。「は」は強調の助詞であることはすぐ分かるかもしれませんが。この場合、とっさに、「が」のついたラーメンが主語であるかのように思ってしまう。しかし、この文章、実は主語落ちです。主語は「私」なのではないでしょうか「あなた」なのではないでしょうか。仮に「私」と考えるなら「今日、私はラーメンを食べたい」とすると、基本的な文章構造としてすっきりします。

このように、「は」や「が」がついていても、それが主語になるとは限らないということです。

### ●強調のための「は」と「が」の使い分け

私たちは「は」も「が」も主語につける助詞として使ってもいます。目的格をつかさどる場合にも用います。その場合でも日常の会話の中で何を強調

するかで、無意識のうちに巧みに使い分けているものです。

例えば次のような場面を想定してみてください。『今晚、懇談会がある。それに根岸さんも出席する予定』。職場の同僚が根岸さんに確認のために声をかける。「根岸さん、今日の懇談会、出席されますか?」と。根岸さん自身が出席の返答をする場合は「私は出席します」となるでしょう。

次に、根岸さんが懇談会の幹事であった場合、「今日の幹事さんどなたですか?」と聞かれたら、当の根岸さんは「私が幹事です」と答えるでしょう。

前のケースのとき「私が出席します」、後のケースのとき「私は幹事です」と答えたとするとも日本語としてとても奇異なものになるでしょう。

主語を示す助詞の「は」や「が」でも、強調したいものが何であるかによって、キチンと使い分けているのです。すなわち、「私」という助詞の前にある語いを強調したい場合は「が」を使います。「出席します」ということより「私」の方を強調したいのです。

それに対して、「は」は後の方を強調したいときに使われます。「幹事です」を強調したいので「は」を使います。

このように、「は」と「が」は意外とやっかいな存在でもあります。そして、その使用頻度も高くなりがちなものですから、多用、乱用には気を付けたいものです。そして、できるだけ、主語をつかさどる限りにおいて「は」と「が」を使用するようにしてみてください。

明瞭表現をするための主語の明確化に関して、次のことにも注意を払いましょう。

主語に対する述語が、文中であまりに離れていると、文意がとりにくくなります。主語と述語をなるべく近付けるようにすることで、「何がどうした」「何がなんだ」「誰がどうすべきだ」などのメッセージを明確に打ち出します。

そのために、主語/述語間の説明部分を簡潔に短くします。場合によっては、その部分を別文章として後回しにしてしまうなどの工夫も大事です。